

Title	和歌山県田辺湾とその周辺海域へのハシボソミズナギドリ(ミズナギドリ科)の漂着
Author(s)	久保田, 信
Citation	漂着物学会誌 (2006), 4: 43-44
Issue Date	2006
URL	http://hdl.handle.net/2433/179169
Right	© 2006 漂着物学会
Type	Journal Article
Textversion	publisher

久保田 信：和歌山県田辺湾とその周辺海域へのハシボソミズナギドリ（ミズナギドリ科）の漂着

Shin KUBOTA: *Puffinus tenuirostris* (Procellariidae) washed ashore in Tanabe Bay and its adjacent waters in Wakayama Prefecture, Japan

2006年の5月下旬から6月初旬にかけて、和歌山県田辺湾とその周辺海域に純海洋性の海鳥ハシボソミズナギドリ *Puffinus tenuirostris* が、少なくとも17羽漂着した。最初の発見は、2006年5月20日夕方、衰弱した2羽が次々と白浜町にある京都大学瀬戸臨海実験所の“北浜”の汀線付近に漂着した(図1)。それら2羽はぐったりしていたものの、嘴で著者の手をつつく元気はあったが飛翔は不可能だった。漂着直後に2羽とも保護し、即座に研究室内に持ち帰り、室温でダンボール箱にいっしょに収容したものの、翌朝には死亡していた(標本は大阪市立自然史博物館保管)。北浜では、同じ20日には頭部のない1羽の打ち上げがあり、また4羽の生体が汀線より数10m沖に浮かんでいた。さらには、少なくとも5羽が北浜付近を飛行していた。なお、2006年5月1日からの北浜などでの定期調査では、18日までの毎日1回の漂着物調査の計12回で本種の漂着は見られなかった。また2006年1月から4月までの調査期間中も本種の漂着は見られなかった。

ハシボソミズナギドリは、翌日の5月21日には7羽が死亡漂着した。このうちの1羽のみは頸部が被害されていたが、この状態よりさらなる被害は約1週間の間には認められず、その後は、恐らく満潮時に流失した。続いて22日に2羽、24日に2羽、29日にも2羽が死亡漂着した。6月に入っても4日に1個の肉がすっかりなくなった頭骨が(標本は大阪市立自然史博物館保管)、7日には1羽が死亡漂着した。いずれも傷はなく、被害の痕跡も見られなかった。

上記の個体の大半は、頭骨での漂着を除き、 -80°C で瀬戸臨海実験所で冷凍保存したが、後に大阪市立自然史博物館と和歌山県立自然博物館へ複数個体を送付し保存を移管した。その後、10月末日までの調査期間中に本種の漂着はまったく見られなかった。なお、数個体の死亡漂着個体は標本として発見後すぐに収容せず、トビやカラス類などによる被害があるかそのままにしておいたが、その後の10日余りの期間中には何の変化もなかった。

ところで、昨年の2005年の同時期にも本種が、合計わずか5羽ではあるが、田辺湾周辺海域に、次々と漂着した。定期的な毎日の漂着物調査中に、1羽が番所崎に死亡漂着していたのを5月22日に発見した。5月24日には1羽が番所崎で釣り糸にからまって生きたまま漂着していたのが保護され(図2)、白浜町を通じた獣医の介護により元気を回復して自然にもどされた。さらには、北浜では、5月29日に1羽が、5月31日にも1羽



図1. 2006年5月20日に和歌山県田辺湾の南岸の瀬戸臨海実験所北浜に衰弱して漂着したハシボソミズナギドリ *Puffinus tenuirostris*

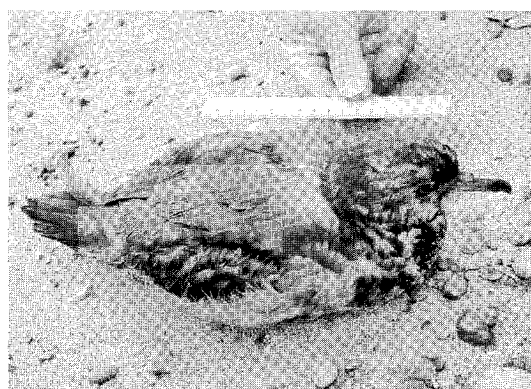


図2. 2005年5月24日に和歌山県白浜町番所崎で釣り糸にからまり漂着したハシボソミズナギドリ *Puffinus tenuirostris*.

が死亡漂着した（久保田，2006）。

津村（2006）による本種の近年の和歌山県下での記録によると，田辺湾周辺海域では，2006年5月22日に田辺湾の海岸線で漂着死体29羽の確認と，2003年5月19日に田辺市天神崎で保護の記録がある。両方の記録とも今回の上述の記録と時期的に合致したものとなっている。なお，本種は漁師や釣り人の針にかかる場合もあるとのことである（津村 2006）。

ハシボソミズナギドリは太平洋を一周する長距離の旅鳥で，タスマニア周辺の島嶼が繁殖地である。成鳥は3月下旬から4月上旬にかけて，幼鳥はそれより1ヶ月遅れで，数10万羽ほどの群れで北へ移動し，赤道を越え，日本列島の太平洋岸をかすめベーリング海へ到達し，北アメリカを回って南下し，太平洋を数万kmの距離を約半年の間に，ほぼ一周し，タスマニアにもどり，再び繁殖するといった長距離の渡りを繰り返している（中西 1990；岡 1996）。本種は，海洋の表層の動物を捕らえて食べているが（岡 1996），繁殖地での餌不足で渡りの初期に餌を十分にとれず栄養失調になったため（中西 1999），あるいは気象条件が悪く飛行・移動が妨げられ，疲労が重なるなどの相乗効果の理由で，ついには衰弱して漂着したのであろう。

謝 辞：ミズナギドリの同定と本稿に対して有益なご意見を頂いた大阪市立自然史博物館の和田 岳氏に深謝致します。また，田辺湾での本種の記録に関する情報提供と本稿に目を通して下さった日本野鳥の会和歌山県支部会員の谷脇智和氏に深謝致します。

引用文献

- 久保田 信. 2006. 鳥と亀の受難. 宝の海から 一白浜で出会った生き物たち, pp. 168-169, 図版53, 紀伊民報, 和歌山県.
中西弘樹. 1990. ハシボソミズナギドリの死骸の大量漂着. 海流の贈り物, pp. 139-141, 平凡社, 東京.
中西弘樹. 1999. 動物の漂着, 鳥類. 漂着物学入門, p. 137, 平凡社新書, 東京.
岡 奈理子. 1996. ミズナギドリ類. 日本動物大百科. 第3巻, 鳥類 I, pp. 21-25, 平凡社, 東京.
津村真由美. 2006. ハシボソミズナギドリ *Puffinus tenuirostris* 2006年 ～エンペリザメールから～. いっぴつ啓上 (94): 7.

¹ 〒649-2211 和歌山県西牟婁郡白浜町459 京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所

¹ Seto Marine Biological Laboratory, Field Science Education and Research Center, Kyoto University, 459, Shirahama, Nishimuro, Wakayama, 649-2211 Japan